



ちくま文庫の「ケルト民話集」を読んでいます。ケルト民話というと森と妖精と生き物たちが出てくる幻想のような話が多いのですが、この本で語られる物語は、哀しい国の哀しい人間たちの物語で、まるでシェークスピア劇を読んでいるようです。それもそのはずで、この本に集められた物語はスコットランドの古い伝説を集めて19世紀のフィオナ・マクラウドという伝奇作家が書いたものなのです。物語の幾編かにエイリイという女性が登場します。どの話でも彼女は勇敢な若ものに心を寄せるのですが、面白いのは結末は幸福であったり、死が待っていたり、と色々なんです。でも、もしかしたら本当の彼女は、こんな結末を迎えたのではないかと物語の一遍を借りてダイジェスト版を書いてみましたが、どうでしょう。

アルトニア人たちの英雄イスラ・コノールが、恭順の印として十人の人質のひとりに加わり、老王コネリイ・モールのところへやってきたとき、彼のその強さ、勇敢さは北方エールで知らないものではなく、男にも女にも愛された。

美しいエイリイがイスラをひとめ見て、たちまち心ひかれたのを知ると、エイリイの母親は内心喜んだが、半面恐ろしくもあった。何故ならエイリイの父親代わりになっていた老王が、彼女をアルトニア人のイスラに嫁がせる筈がなかったからである。

時に、アルト・マク・アルトという勇敢な男が居た。老王は彼に目をかけていて、エイリイを妻として与える口約束をしていた。そのアルトが、ある日、老王に言った。

「エイリイは、わたしの山にいる牛の声を聞くことになるのでしょうか」

「そうだと、アルト・マク・アルトよ」

「エイリイに話しかけてみましたが、草の間を吹く風のように手応えがありません」

「女とはそうしたものだよ、アルト。ただ、来い、とひとこと言えば良いのだよ」

「彼女に来いと言いますと、流れる水は昨日の風を聞いたりはいたさぬもの、と応えるのです。こうせよと言いますと、キツネが鳴くからといって、山がいちいちうなずきますの、と彼女は応えるのです」

「アルトの子よ、お前は何が言いたいのだ」

「言いましょ、彼女が愛しているのは、アルトニア人のイスラなのです」

エイリイの母親がイスラの部屋を訪れたのは、老王とアルトの会話を耳にしたからである。彼女はその部屋に思いがけず娘の姿を見出した。娘はそっと微笑んだ。

「種はもうまかれたのですね。わが娘の良人となる人よ」

「まかれました」

「ならば、死の報いがあります」

「潮は満ち、そして引くものです」

「このことが老王に知れたら、今夜二人とも命を落とさなければなりませんよ」

「殺されることは、たいした不幸ではありません」

「エイリイは女なのです。それにあなたの子を宿しているのです」

この時、エイリイの胸に潜んでいた恐怖が、闇の中を飛ぶ白い鳥のように動き出した。彼女は母親が真実を語っていることを知っていた。彼女は良人にこう言った。

「イスラよ。どうか一人で逃げてください。私たちの子が死を望まないのなら、私たちはそうしなければならないのです」

こうしてコノールの子、アルトニア人のイスラは一人で立ち去った。白みゆく夜明けの方角に向って、ゆっくりと馬を北東へ進めて行った。

エイリイは芝生を踏みつけるような音を聞いた。その日、彼女に悪い事が起こった。老王がみずから彼女のもとにやってきて、アルトを彼女の横に立たせたのである。そして、彼女にアルト・モールの子に妻となる約束をしてやってはくれないか、と頼み込んだ。「それは出来ません」と、彼女は言った。彼女の心から恐怖は消えていた。

「わたくしの腹にあるのは、アルトの子ではないからです」

彼女は老王の顔を見上げてきっぱりと言った。老王の顔が暗くなった。

「お前は娼婦か」

「いいえ、わたしの母の誠実さにかけて、母のそのまた母の誠実さにかけて、私の愛しているのは、アルト・モールの子とは違う男でございます」

「誰だ、その男とは？」

「アルトニア人のコノールの子、イスラでございます」

その言葉を聞いたアルトは突然激しく笑い出すと、手をあげて娘の頬を打ち据えた。それを見た老王の顔に不快の色が走った。老王は二人を見据えて言った。

「わが娘、エイリイよ。わしはお前をアルトに引き渡さぬ。といってアルトニア人にお前をやることは出来ぬ。お前は豎琴弾きのクレヴィンの妻となるのだ」

エイリイは北の果のクレヴィンの砦に住むことになった。そこはささやかな砂地と、潮にそば濡れた草地と、黄色い地衣(こけ)を海風が濡らしている土地だった。

クレヴィンは年老いて醜い男だったが豎琴の名手だった。彼はシイアの山に住む緑の琴引きと呼ばれる妖精に手ほどきを受けたのである。彼は毎夜のようにエイリイに琴を聞かせた。エイリイは聞いているうちに深い悲しみに襲われ、涙ぐんだ。そして最後には壁のほうに顔を向けて、肩を震わせて寝入った。

そのエイリイが月満ちて男の子を出産したのは、それから半年後のことである。

エイリイが出産の痛みに耐えている間中、クレヴィンはその子が目も見えず、口も効かず、耳も聞こえない子に生まれてくることを願って琴を弾き続けた。それを察したエイリイは、自分の目の後ろの霊に「この子に光をやってください」と囁いた。耳の後ろの霊に「聴覚をやってください」と囁いた。それから自分の沈黙の下で黙り込んでいる霊にも、「ことばをやって下さい」と囁いた。

クレヴィンは、妻が子を出産したのを知るとその子を取り上げ、月夜になると妖精

たちが踊り戯れるという草の上の鹿の皮に寝かせた。それから彼は琴を奏で始めた。

森の奥から琴の音に誘われて、小さな美しい人々が足音を忍ばせて草の上に出てきた。彼らは緑色の服を着ていた。彼ら、森の妖精たちは蘆笛を取り出し唇にあてて吹き出した。その響きは、クレヴィンの琴の音と混じりあい不思議な調べを奏でた。赤ん坊が妖精の笛をきいて、魂を自由にすることが出来たのは、その時だった。

「小さくなれ、小さくなれ、小さくなれ」

妖精たちが口々に呟いた。すると、赤ん坊の魂は小さくなり、妖精たちが楽しげに歌いながら、赤ん坊の手を引いて歩き出した。

エイリイはそれらの全てを夢の中の出来事のように、しかしはっきりと見ていた。

「どうやら、妖精たちが取り替え子を置いて行ったようだ」と、クレヴィンが言った。

エイリイは、鹿皮の上に寝かされた彼女の子供が、息をしていないことを知った。

アルトニア人のイスラが、再びエイリイの前に姿を現したのは、白い花の月だった。

イスラは日中から日没まで馬を走らせ、丘の上に荒れ果てた古城を望むところになると、馬に乗ったまま、胸をそらしエイリイの歌を歌った。

「ああ、野生の鷹にわが名を運ばせて、きみがその名の力で引き裂かせよ。かつてはその名に熱く応えた心をば。エイリイ、エイリイ、オーリ、エイリイ、エイリイ！」

その歌は高い調子ではっきりと響き渡ったので、エイリイはそれを聞きつけた。

それはまるで、二つの波が出会うようだった。二人はひしと抱き合った。そして言葉もなく唇を重ねあった後で、やっと二人は手に手をとって歩き出した。

二人が歩き出したとき、イスラの剣が草の中を渡る風に似た囁き声を漏らした。

「いまのは何？」と、エイリイは目を見開いて、尋ねた。

「草地を渡る風だ」と、イスラは答えた。

二人が砦に入っていくと、剣は松をゆする風のような音をあげて囁いた。

「いまのは何？」と、エイリイは恐怖の色を目に浮かべて、問いただした。

「森を吹きぬける風だ」と、イスラは答えた。

イスラに食べ物振舞ったあとで、二人は居間に入って身を横たえた。そのとたん、剣の囁きが、暴風の海にさわぐ高波そっくりの音をたてた。

「いまのは何？」エイリイはのどをつまらせるようにして、涙ぐみながら叫んだ。

「ただの海風だ」

「いいえ、いいえ、ここから三日も行かなければ、海なんかありませんわ」

イスラはもう何も答えなかった。そして足早に部屋を出て行き、馬に乗ると今来た道に戻っていった。

その夜、エイリイはクレヴィンの豎琴の調べを聴いても涙が流れないのを悲しんだ。彼女は永遠の時が流れ去ったのを知った。

イスラが北方の戦いで死んだことをエイリイが聞いたのは、彼女がクレヴィンの三人目の子を宿している時だった。それから彼女はさらに五人の子を産んだ。そして夫のクレヴィンが死んだ後も、長い時間彼女は生き続けた。 (おわり)



## 2月12日(日) 継体天皇の奥津城を訪ねて

茨城から来られた大木さんが言われていた古事記の歌碑の記事をネットで見ました。

春日大社の東側参道の脇に去年の12月23日に建てられたもので、有名なヤマトタケルの国偲び歌が原文と現代文で記されています。万葉の犬養先生の揮毫で、先生の歌碑を境内に建立したいという春日大社の切望を、大木

さんの尽力で実現したものの、先生の古事記の歌碑としては最初のものだそうです。

『夜麻登波 久尔能麻本呂婆 多多那豆久 阿袁加岐 夜麻暮母禮流 夜麻登志宇流波斯 孝書  
倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭し麗し 「古事記 中巻」歌謡三 』

別の話ですが、古事記は声を出して読まなくてはいけない、という話を聞きました。それも原文で、意味は分からなくても、とにかく声に出して読んでみる。奈良の図書情報館長の千田稔先生の話です。先生によると、古事記の歌謡は古代の大王の宮殿で歌われていたもので、その時は歌謡に合わせた芝居が演じられたのではないか、だから歌謡の部分は芝居のセリフにあたるもので、古事記は古代のドラマのシナリオだという訳です。確かに書紀でも雄略天皇の記事には宮殿で演じられたて演劇の記事が出てくる。ヤマトタケルのこの歌も、そこで歌い継がれた歌なんではないでしょうか。古事記は意味は分からなくともまず朗々と読んでみる、いいですね。是非やりましょう。馬場先生にこの歌碑をコースに入れて貰って、歌碑の前で犬養節で読もうじゃないですか。

これは、古代のステージでしょう。この今城塚古墳の前に造られた特設ステージの武人や巫女や楽人たちは、ステージ上の俳優でしょう。でも彼らは何をしているのだろうか。冊子によると、これは継体天皇の殯宮儀礼を再現したもので、

『継体の亡骸の周りでは号泣と匍匐(ほふく)が行なわれ、悲歌挽歌が詠まれ……(喪屋の外で)鎮魂儀礼として歌舞飲食・匍匐儀礼・言挙げなどのパフォーマンスが行なわれ……』とある。これはかなり賑やかな光景だったに違いない。

日本書紀の継体天皇24年に、朝鮮遠征軍司令官の近江毛野臣(けぬのおみ)が対馬で病死して、彼の柩が淀川から近江に上る時に、彼の妻の歌った歌が出ています。

「枚方ゆ 笛吹き上る 近江のや 毛野稚子(けぬのわかこい) 笛吹き上る」

夫の遺体が運ばれてきた舟で、楽人たちが賑やかに演奏していたという訳です。

継体天皇が磐余の玉穗宮で崩御するのは、その次の年、継体25年の春2月のことです。そして冬12月5日に藍野陵(摂津三島)に葬ったとある。だから約1年の間磐余の殯宮での殯のあと、遺体は三島に運ばれたのでしょうか。たぶん横大路から二上山を越え淀川を上って、もちろん殯宮で仕えた人々が笛吹きならし、賑やかに遺体に付き従ったことでしょう。それはまるでこのステージの埴輪のようだったのです。

池永さんのお風呂の話、「施湯とは、貧しい人々に衣食を施す一環で、人々の救済に繋がると信じられた。」分かります。特にこんな寒い夜のお風呂は何よりのご馳走です。